

アフリカ旅行記

何があっても、アクナマタータ



満月かささぎ

アフリカ旅行記

何があっても、 アクナマタータ



満月 かささき

目次

写真・尾張 哲哉

- 一・アフリカに行こう！
- 二・怒涛の予防接種
- 三・タンザニアのピザを取る
- 四・果たしてアフリカへ行けるのか！？
- 五・孤島リゾート「チャーレ・アイランド」
- 六・サファリへの戦い
- 七・とうとう、サファリだ！！
- 八・アンボセリ国立公園まで
- 九・マサイの村を訪ねて
- 十・レイク・ナクル国立公園まで
- 十一・マサイマラでチータを探す
- 十二・旅の終わり
- 十三・戦いの幕切れ

一．アフリカに行こう！

夫の仕事の関係で今年も夏に休みがとれなかった。夫は、自動車会社の社員で、新車導入など大きなイベントがあると、かなり長期にわたり出張に出してしまう。夏休みどころか、イベント中は週末も休むことはできない。今回の仕事有一段落したら、取れなかった夏休みと週末働いた分をまとめて、二週間くらい休みをとることにした。

さて、せっかくの長い休み、どこへ旅行しようかという話になったが、すぐに、アフリカに行こうと決めた。いつもは、休みが取れたら何を差し置いても潜りに行く私たちだが、今回は、野生動物を見るサファリに出かけることにしたのだ。サファリに一週間、その後は海辺のリゾートでのんびりとするパターンなら潜ることもできる。そうだ、アフリカに行こう。

私たち夫婦には、以前からアフリカへ行きたいという希望があった。私は子供の頃、「動物図鑑」が愛読書で、一番好きなテレビ番組が「野生の王国」という、今から思えば動物オタクの子供だった。夫も同じような子供だったらしい。「野生の王国」の最後には必

ず、白髪の小柄な老人が出てきて「こんなに
素晴らしい野生動物も、今絶滅の危機に瀕し
ています。この野生の王国がいつまでも存続
するために人間は努力をしなければなりません
」と野生動物保護を訴える、というパター
ンだった。すっかり番組に夢中だった私は、
「絶滅する前にぜひ一目実物をみなくてはな
らない！」という危機感を持つ様になってい
たのかもしれない。実物を自分の目で見てみ
たい動物のうち、海のものである鯨について
は、十年ほど前に動物保護団体の調査に参加
し、水中で一緒に泳ぐという夢を実現させる
ことができた。次はやはり、象、キリン、ラ
イオン、豹など、憧れの野生動物の宝庫、ア
フリカに行かなければならない。そしてアフ
リカは、日本からはとても遠い。長い休みも
必要になる。それならば、ドイツに住んでい
る今のうちに行っておいたほうがいいに決
まっている。それが今回のアフリカ行きを決
めた背景である。

実際に、具体的な旅行の計画をたてたのは
八月の終わり、夫の仕事の見とおしがついた
ときだった。あちこちの旅行会社のパンフ
レットを集めて検討してみたが、行きたいと
いう希望はあっても、なにせアフリカについ

てほとんど予備知識がない。そのうえパンフレットはすべてドイツ語で書かれている。一体どのサファリツアーを選んだらいいのかまったくわからない。私がもらってきたパンフレットでは、アフリカ行きのパッケージツアーはどれも、ドイツの主要空港とケニアのモンバサ空港を結ぶ路線が基点になっている。モンバサの海岸にあるリゾートホテルに滞在して、オブションでサファリツアーを申し込む、というのが基本形の様だ。オブションのサファリツアーには、ケニア国内の、コースや日数の違うものが何種類かと、八日間のタンザニアのサファリが一つあった。わからないなりにパンフレットの読解をすすめていくうちに、なんとなくだがタンザニアがよさそうに思えてきた。日程も一番長く、金額も一番高いが、セレンゲッティやンゴロンゴロという聞き覚えのある地名がいくつもある。よし、どうせ行くならこれにしよう。これで行く先は決まった。ドイツからまずケニアのモンバサに飛び、そこからすぐにタンザニア。サファリ八日間のツアーに参加して、再びケニアに戻りケニア南部海岸沿いの小さな島のリゾートに七日間滞在するというパッケージツアーを申し込んだ。

旅行の申し込みをしてから気づいたのだが、タンザニアに行くためには、ヒザが必要で（ケニアだけなら不要）、黄熱病の予防注射も義務付けられている。マラリアの予防薬は義務ではないが、服用が望ましい、とパンフレットには記されている。最近ナイジェリアで開催されたサツカーワールドユース大会に、予防注射が間に合わなくて参加できない選手がいた件を思いだし、義務付けられていなくても受けておいたほうがいい予防接種が何種類もあるということに気づいた。そして、以前医者にかかったときに「アフリカ方面へ旅行される方は、早めに予防接種の相談を」という張り紙があったことを思い出した。旅行に行くのは十二月に入ってからだが、これは早めに予防接種についてお医者さんと相談してスケジュールを組んだほうがいい、と思った。というのも、夫は十一月の終わりまで出張の嵐で、ほとんど家にいない。旅行に出かける前に必要な予防接種ができるのだろうか、という心配がでてきたからだ。さっそく、医者に電話して予防接種相談の予約を入れたのは、九月の始めのことだった。

二．怒涛の予防接種

医者に予約を入れ、アフリカ旅行のために必要な予防接種の計画をたててもらおう。義務付けられている黄熱病については、保健所で受けることになっているが、それ以外に受けておいたほうがいいもの、というのが旅行する地域によって何種類かある。医者は私たちの行き先を聞くと、一覧表のようなものを取りだして、必要な予防接種を書き出した。

それによると、黄熱病以外に旅行前に受けておいた方がよいものは、破傷風、ポリオ、ジフテリア、肝炎、チフス、マラリアということだった。黄熱病は、到着日の十日前までに一回接種すればよい。破傷風は二週間以上の間隔をあけて二回以上の接種が望ましいとのことだが、一年ほど前に二回は済ませているので、あと一回接種するだけでよいとのこと。だが、肝炎、ポリオ、ジフテリアはそれぞれ少なくとも二回接種しなければならぬ。チフスとマラリアは飲み薬だが、間隔を空けて何度か継続して接種しなければならぬ。それぞれ、相互作用の危険性などを考慮して、接種の順番と日程を決めていく。問題は夫の出張だが、三ヶ月ほどの期間があるのでなん

とかやりくりがつきそうだった。

かくして私たちの怒涛の予防接種スケジュールが組まれた。

九月二十二日 破傷風、ポリオ（一回目）、

ジフテリア（一回目）

十月一日 肝炎（一回目）

十月十二日 ジフテリア（二回目）

十一月二日 ポリオ（二回目）、肝炎（二回目）

十一月三日 黄熱病

十一月七日 チフス（一回目）

十一月九日 チフス（二回目）

十一月十一日 チフス（三回目）

十一月二十六日 マラリア（一回目）以後

一週間おきに八回接種

これだけ予防接種を受けると、一回くらいは副作用に苦しむことになるだろう、と予想していたのだが、注射したあと筋肉痛になるくらいで、結構大変だと聞いていた黄熱病もこれと言って辛い症状もなく無事に済ませた。

残るは飲み薬だけだからもう心配はあるまい、と一安心して十一月七日、予定通りチフスの第一回目を飲んだ。ところがその翌日、夫が帰宅するなり体調の不良を訴えた。私もなんとなく疲労感があつて、からだがだるい。

数ヶ月前からダイエットのため摂取カロリー
のコントロールを続けていたので、体力が落
ちているのかもしれないということで、その
晩は栄養のあるものを食べて早く寝た。しか
しその夜、夫はかなりの高熱を出してしまっ
た。翌朝熱を測ると四〇度以上ある。私も三
八度台の熱だ。ひよつとして予防接種の副作
用か、と心配になり医者にも電話してみる。ひ
とまず診察してみないとなんともいえないと
いうので、すぐに医者へ。

症状のほうは、寒気、頭痛、関節痛という
発熱時の症状だけで、のどの痛みや鼻などか
ぜのときにみられるような症状は今のところ
ない。二人一緒に発症しているのだから、風
邪とかインフルエンザよりも、前日飲んだチ
フスの予防薬の副作用というセンのほうがか
さい。医者も念のため専門の機関に問い合わ
せてくれたが、チフス予防薬について今まで
にそのような報告例はない、とのこと。とり
あえず、解熱剤とビタミン剤などの風邪のと
きに処方する薬を出してくれた。夫は三日後
から三泊の予定でイタリア出張を控えている。
この薬を飲んで様子をみて二日後にまたくる
ように言われた。チフス予防薬は、一日おき
に三回続けて飲まないといけないのだが、こ

の症状が収まるまでは接種しないほうがいいだろうという判断になった。

もらった薬を飲んで二日ほど安静にしていたら、熱はすぐにひいた。しかしさすがに、出張に行くのはキャンセルし夫は家で仕事をすることにした。

チフスの予防薬のほうは、一度中断してしまつたので、もう一度始めから飲みなおさないといけないらしい。なおかつ、チフスの予防薬とマラリア予防薬の間は最低一周間の間隔をあげなくてはならない。マラリアのほうは、出発の最低一週間前（十一月二十六日）には飲み始めなければならぬから、逆算すると十一月十五日に再びチフス予防薬を飲み始めないといけないことになる。熱が下がつたのが十二日だったから、ほんとうに間一髪というところだ。三ヶ月前から計画をたてていたおかげで、予防接種スケジュールに一周間ほどの余裕があつたのでぎりぎり助かつたのだ。チフス予防薬の服用を再開するとき、また同じような症状が出るのでは、とちょっと心配だったが、今回は、体調不良は一切なく、以後一日置きに三回飲んだ。あとは一週間後にマラリア予防薬を飲み始めるだけだ。こんなに予防接種を受けたからには、もうど

こへ行っても大丈夫、何も怖いものはない。

しかし、そのようなおめでたいことを言っていたら、友人・知人の方々から「マラリア予防薬はあんまり飲まないほうがいい」という忠告を受ける。予防薬の副作用もかなりきつしいし、薬自体の安全性にもかなり不安な点がある。自分だけならまだしも、子供など次世代への影響も大きい、という。そ、そんな恐ろしい薬だったのか！と驚いて、急いで医学関係のホームページなどを漁る。

いろいろなホームページを読めば読むほど、マラリアが恐ろしい病気であることがわかり、同時にマラリア予防薬にも様々な問題があることがわかってきた。マラリアといってもいろいろあるが、私たちが行くタンザニアは死亡率の高い「熱帯熱マラリア」の危険地帯になっいて、在フランス日本大使館医務室のホームページによるとマラリア予防薬は絶対必要とされている。一方、医者が私たちに処方してくれた薬は「メフロキン」というものだが、こちらのほうも「服用中止後三ヶ月は避妊するべし」とか「抑鬱症状などの精神障害やめまい、平衡間隔の異常がおこることがある」などと、かなり恐ろしいことが書いてある。こうなってくると、いろいろな資料を

読めば読むほど、どうしていいかわからなくなってくる。しかし、死亡率の高い危険な病気なのだ。私がマラリアで死んでも、「薬は飲まないほうがいい」と言った人が責任をとってはくれないだろう。ある人は、たまたま薬を飲まなくてもマラリアにはならなかったかもしれない。だからと言って、専門機関が必要だと言って、いる薬を「飲む必要なし」と言いきることができるのだろうか。いろいろなりスクを考え合わせて秤にかけて自分で決定するしかない。結局、薬が一〇〇%有効でないにしても、副作用の危険があるにしても、死亡する危険を薬で回避できるものなら試してみるべきだと判断し、予防薬を飲むことにする。

ぎりぎりまで悩んで、飲むことにしたマラリア予防薬だが、いざ飲んでみると心配していた副作用はほとんどなかった。その後も一週間置きに八回、旅行から帰ってきてからも四週間ほど飲みつづけたが、特に辛いと感じたことはなかった。

マラリア予防薬に限らず、予防接種については、義務付けられていないならそこまでしなくてもいいのでは、という人もいた。だが、現地に出会った人からいろいろ話を聞いて

みると、やはりできるものはすべて受けておいたほうがいいようだ。ある人は、肝炎にかかって六週間も食事がのどを通らず、寝たきりになって別人の様にやせ細ってしまったらしい。肝炎はかかってしまうと、薬などの有効な治療法がなく、治癒するまでかなり大変だということだ。マラリアで死ぬ例はそんなに多くはないようだが、だからと言ってまるつきり予防をしなくていいということにはならない。蚊に刺されない様に万全の体制をとって薬を服用せずにすまそうという人もいる。しかし、どんなに細心の注意を払っていても、アフリカのそれもサファリなどの屋外活動を目的とした旅の間まったく蚊に刺されない様にすることは、実際には不可能だ。蚊に刺されてしまっただけで「どうしよう」と不安になるよりも、薬で予防できるならしたほうがいい、と私は思う。

ちなみに、この予防接種すべてにかかった費用は、二人合わせて一七三五・七三マルク（約九万六〇〇〇円）。八割くらいは会社の健康保険から出るらしいけれど、これはかなりの出費である。まったく、アフリカに行くのも大変なのだ。

三・タンザニアのビザを取る

予防接種の計画をたて、なんとか旅行前に済ませられるめどがついた。あと旅行前に必要なのは、ビザの取得である。

九月中旬、旅行会社のほうから、旅行代金の請求書と一緒にタンザニアビザの申請用紙と申請方法の説明書が送られてきた。またしても、説明書きはドイツ語である。お役所関係の手続きなので間違いがあつては困るため、インターネットの翻訳サイトを利用して英訳する。

これによると、タンザニアのビザを取得するためには、申請用紙、写真、申請費用などと一緒にパスポートを在独タンザニア大使館まで郵送することと書いてある。申請手続きとしては、ごくあたりまえのものだ。しかし問題は、「処理に二〜三週間かかるので、出発の少なくとも四週間前には手続きしなさい」というところだ。ビザの申請をしている四週間の間、パスポート無しで生活しなければならなくなる。私はともかく、夫はこれから十一月下旬まで出張の嵐の真っ只中にいる。スペイン、デンマーク、イタリア、タイ、マレーシア、日本などドイツ国外への出張が続

いて、一週間続けて自宅にいないことすらないのだ。パスポートを郵送してしまうわけにはいかない。

仕方ないので、タンザニアの大使館に事情を説明するファックスを送り、郵送以外に申請方法はないのか、万が一事前に申請ができなかった場合には、ケニアからの入国時に申請することができるか、を問い合わせた。しばらくして大使館から直接電話があった。平日の朝十一時前までに、必要書類を直接大使館へ持参すれば、すぐにビザを発行してもらえてその日の午後にはパスポートを受け取ることができるとい話だった。旅行会社の説明には、そんなことは一切書いてなかったけれど。でも、大使館はボンの近郊にもあるので、こちらのほうへ出向くのはそれほど大変ではなさそうだし、一安心というところである。

しかし問題は、またしても夫のスケジュールだ。ただでさえ、出張ばかりでほとんどドイツにいないのに、出張の前後にはやるべき仕事如山積みだ。そんな中、予防接種関係でしよっちゅう仕事を抜けて、さらにビザの申請で半日もつぶすことができるのだろうか。

気にはしていたのだけれど、なかなかうま

く時間をつくることができず、結局タンザニア大使館へ行つたのは旅行出発の二日前、十二月一日のことだった。行ってみると、窓口に必要な書類を提出するだけでおしまいだった。あとは、午後一時過ぎに受け取りにくれればいいとのこと。その後は私だけが残って二人分のパスポートを受け取ることにした。申請について、特に本人でなければいけないような様子もなく、ひよっとしたら最初から私が一人でもよかつたのかも知れない。

と、まあいろいろいる、直前まではらはらしたが、なんとかピザも取り、予防接種もマラリア薬以外は無事済ませて、あとは旅行に出るのみとなった。

四・果たしてアフリカへ行けるのか!?

十二月三日 金曜日

朝からものすごい強風。家の前のゴミ箱が、風でとばされ何度も倒れている。このような状況で、飛行機は無事飛ぶのだろうか、不安になる。出発予定は、夕方なので時間にゆとりがあるが、やるべきことがいっぱいあつて心配で寝ていられず、朝早くから起きて活動開始。

最終的な荷物のパッキング、留守宅の防犯のため照明やラジオのタイマーセット、留守中植木の水やりを隣家にお願ひするため最低限の部屋の掃除などを済ませる。銀行に行つて諸々の送金手続きと米ドル現金購入。猫をいつものペットホテルに預ける。今回はベトナムホテルの主が休暇中で、代理の人が受け取ることになっており、預けられる時間が一番早くても午後三時。四時には家を出なければいけないのでやや不安だったが、約束の時間にきちんといてくれたので問題なく猫を置いてくることができた。家に戻り、タクシーを呼ぶ。すぐにタクシーがきて、四時少しすぎには空港に着いてチェックインまで済ませてしまった。すべて順調に行きすぎて、恐いく

らいだ。

これからのスケジュールは、

十七時十五分 デュッセルドルフ発（ルフ
トハンザ）

十八時四十分 フランクフルト着

十九時四十分 フランクフルト発（コンド
ル・チャーター便）

翌六時十分 モンバサ着

その後すぐにタンザニアサファリに出発
（飛行機にてタンザニア・アルーシャ空港
へ）

となっている。出発まで時間があるので、夫
が会員になっているルフトハンザのビジネス
ラウンジへ。出発前の雑事が全て無事片付い
たのですっかりリラックサして、無料の生
ビールやワイン、トマトジュースなど飲んで、
搭乗開始の十七時二十五分まで過ごす。

搭乗時間が近づいてきたので、搭乗ゲート
へ。しかし搭乗時間が来ても、肝心の飛行機
がこない。出発の時刻も過ぎてしまった。フ
ランクフルトでの乗り継ぎの時間があまりな
いので、ここで大幅に遅れたりすると大変だ。
心配になって旅行会社のネッカーマンに電話。
私たちの他にも一〇人ほどモンバサ行きに乗
り継ぐ人がいるので、一時間程度の遅れなら

待つ、という返事。

十八時近くなつて、ようやく飛行機が来る。十八時二十五分、なんとか搭乗開始。このくらの遅れならなんとかなる、と思つたのだが、飛行機がなかなか出発しない。機械のトラブルがあるらしく、しばらく待つてくれ、というアナウンス。いらいらしながらも、おとなしく待つしかない。

三十分ほど飛行機に閉じ込められた状態が続いた。十九時近くなり、「機体故障のため、このフライトをキャンセルします」というアナウンス。他の乗客は、直後のフランクフルト便に振り替えて出発。しかしモンパサに行くツアー客は、乗り継ぎ便が発してしまつたらフランクフルトへ行つても仕方ないため、調整が必要ということでデュッセルドルフに残される。ルフトハンザの係員の指示があるまでどうにも動けない。残されたのは、私たち二人の他ドイツ人九人、オランダ生まれで今ドイツで働いているというイタリア人女性一人の総勢十二名だ。しかし、みんなサンダル履きのような気楽な格好で、トレッキングシューズなどを履いていかにもサファリに行くような格好をしているのは私たち二人だけだ。よくよく聞いてみると、私たちの他はみ

なモンバサから海辺のリゾート直行のリピーターで、誰もサファリには行かないらしい。こういう人たちは、一日遅れでも現地に着きさえすればいいのだから、比較的気が楽だろう。

結局、直後のフライトでフランクフルトへ飛んでいれば間に合う時刻まで、乗り継ぎチャーター便が出発を遅らせて待っていてくれたのだが、それがわかったときにはすでに遅く、私たちはそのモンバサ行きのをあきらめるしかなかった。航空会社間の連絡の悪さに腹が立つが、もう後の祭である。デュッセルドルフ空港に取り残された私たち十二人は、次の方策を検討するため、ルフトハンザのカウンターでそれからさらに長いこと待たされ続けた。ようやく、ルフトハンザが代替としてオファーしてきたフライトは、翌日の早朝アムステルダムへ飛んで、そこからナイロビへ飛んで、そこからモンバサへ行くというもの。モンバサに着くのは、翌日の深夜だ。これではタンザニア・サファリに間に合わない。サファリができないのなら、アフリカに行ってもしかたないので、ネッカーマンに電話すると、「一日遅れか二日遅れで、サファリの中継点で追いつける様に、現地スタッフ

が手配するから大丈夫だ。とにかく現地に行ってくれ。その後のスケジュールは、到着後現地スタッフのほうから聞いてくれ」という返事だ。果たして本当に一日とか二日遅れで追いつくことなどできるのだろうか。ものすごく不安だが、今はそれを信じて先に進むしかない。

出発が翌朝早いため、空港のホテルに宿泊することになった。ホテルの宿泊代、四〇マルクまでの夕食、朝食付きというパウチャールフトハンザからもらう。ホテルにチェックインしたのは、二十一時を回っていた。英語を話すイタリア人女性と一緒に夕食をとる。他のドイツ人たちは、ほとんどドイツ話しか話さないで、なかなかコミュニケーションがとれない。ホテルのレストランであんまりおいしくないワインと食事を取り、二十三時半就寝。くたびれ果てた。

十二月四日 土曜日

五時起床。七時出発の便なので、六時にはカウンターに行かなければならない。五時半にレストランが開くと同時に入って大急ぎで朝食。チェックアウトを済ませて、十二人そろって、KLMのカウンターへ。

・今日のフライト予定

七時〇〇分 デュッセルドルフ発 (KLM)

七時五十分 アムステルダム着

十時四十五分 アムステルダム発 (KLM)

二十一時二十五分 ナイロビ着

二十二時三十分 ナイロビ発 (ケニアエア
ウェイズ)

二十三時三十分 モンバサ着

昨日のルフトハンザ係員の説明では、十二人を一グループとしてブックイングし、KLMのカウンターでモンバサまでのチケットをまとめて受け取ることになっていた。ところが、コンピューターの不調か、回線が込んでいるのか、システムが不具合なのかよくわからないが、なかなかチケットがでてこない。出発の時間がどんどん近づいてくる。しかたないので、とりあえずアムステルダムまでのチケットだけを受け取り、それ以降のフライトのチケットについてはアムステルダムのKLMカウンターで発券してもらうことにして搭乗。セキュリティチェックを受けるまで、最終呼び出し案内で自分の名前を二回ほど聞き、後は一気に搭乗ゲートまで走る。結局出発を十分ほど遅らせてしまった。でも私たちの責任じゃないよお。

五十分のフライトだというのに、紙袋に入った簡単な朝食が出た。忙しい。とりあえずジュースとお茶だけ飲んだ。

無事定刻アムステルダム到着。すぐにKLMカウンターに行く。しかし、ここでもチケットの発券ができないと言われる。昨夜のルフトハンザ係員からの説明では、すべてビジネスクラスに予約を入れてコンファームも済んでいたはずなのだが、なんと昨夜コンピュータートラブルがあり、オーバーブッキングになつてゐるとのこと。十二人のグループで予約を入れたはずなのに、六人分しか席がないといわれて愕然。どうしようもないので、搭乗ゲートが開くまで待ち、キャンセルなどであいた分のチケットを受け取るしかない様だ。当然、ビジネスクラスではない。

時間があつたので、再びネッカーマンに確認の電話を入れてみる。しかし昨夜の担当者はおらず、電話に出た人も「現地の手配状況については、こちらからでは何もわからないのでとにかく現地へ行ってくれ」というだけ。まったく不安は増すばかりだ。

搭乗開始直前になつて、なんとか全員エコノミーのチケットを手に入れることができた。十時四十分搭乗。しかし、ここでもらえた

チケットは、またしてもナイロビまでだ。ナイロビからモンバサまでのチケットについては、またナイロビで交渉しなければならぬようだ。しかも、ナイロビでの乗り継ぎ時間は、一時間ほど。入国手続きやらなにやらを考えるとまた頭が痛い。この上さらにナイロビに泊まるというパターンだけはなんとしても避けたい。また、無事今日中にモンバサに着けたとしても、その後のスケジュールは一体どうなっているのだろうか？とにかく不安がいつぱいあって、やっと飛行機に乗ったというのに、とてもくつろぐ気分ではない。

いろいろ不評を聞いていたKLMの機内サービスだったが、思ったよりもよかった。昼食はかなりよかったし、途中アイスクリームがサービスされてびっくり。しかし夕食はブリトーひとつだけ。暖かかったのでまあ、おいしかったけれど。

二十一時四十五分ナイロビ到着。予定より二十分ほど遅れた。時間がないのでモンバサ行きの人を先に飛行機から降ろしてくれたのはいいのだが、荷物を受け取ってから国内線にチェックインしなければならず、その荷物がなかなかでてこない。チケットももっていないので、まったくあせる。空港係員に事情

を説明して、チェックインカウンターに話を通してもらおう。

ようやく出てきた荷物をカートに載せて、国内線のカウンターまで走る。カウンターに行く、「チケットは？」と聞かれる。まったく話を通っていない。汗をかきながら事情を説明、なんとかチケットをもらって搭乗。またまた走った。私たちが最後の乗客だったので、適当に空いている席に座る。定刻どおり出発。

二十三時三十分、無事モンバサ到着。ここまでくれば、とりあえずは安心という気持ちと、これから先一体どうなるのかという不安と半分半分である。空港を出たところに、ネットワークマンの出迎えの人がいて、「どこのホテルか？」と聞く。やはり何も聞いてないらしい。タンザニア・サファリに行くはずだったのが飛行機が飛ばなくて行けなくて、これからの予定は現地で聞くように言われている、と説明する。出迎えの人は、空港内のネットワークマン事務所のほうを覗いて私たちあての手紙を発見。今夜は遅いので途中のネプチューン・ヴィレッジ・ホテルというところに泊まり、翌日、サファリの後に宿泊予定だったチャーレ・アイランドのほうへ移動する様に、

という指示が書かれていた。その後のスケジュールについては、月曜日の午後には電話してほしい、という内容であった。ということ、少なくとも月曜日まではサファリに行くことはないとということになる。当初の予定だったタンザニア・サファリに遅れて参加するということとはまず無理だろう。まったくこまできても、ちつとも不安は解消されていない。

ネプチューンに行く他の人たちと同じ車に乗る。モンバサが最終目的地だった彼らは、もう開放感いっぱい、元気はつらつではしゃぎまくっている。まったく外国旅行にきているドイツ人ほど騒がしい人種はいない。

途中フェリーに乗るのを知ってびっくり。そうか、モンバサは島だったのかあ。何も知らないで旅行に来てしまったのだなあ、とつくづく思う。

午前二時ごろ、ようやくホテルへ到着。降るような星空に感激。とにかくお腹もすいていたし、のども乾いていたのだが、こんな時間でも当然レストランもバーも閉まっていた。部屋にはミニバーなどという洒落たもんはない。しかたないので、がまんして冷たいシャワーをあびてさっさと寝る。しかし蛙の鳴き

何があってもアクナマタータ

声 が も の す ご く う る さ く て 寝 ら れ ない 。 た ま
ら ない ほ ど 蒸 し 暑い の だ が 、 窓 に 網 戸 が な く
蚊 が 心 配 な の で エ ア コ ン を つ け て 寝 る 。 し か
し 、 今 度 は エ ア コ ン が う る さ い 。 ま っ た く 不
快 な 夜 で あ る 。